

第二言語習得における文字の影響

國府方 麗夏

序

オング (Ong, 1982) は文字が記憶の妨げになると述べている。ここでの文字とは単音文字⁽¹⁾のことを指す。これは第二言語習得 (以下 SLA) にも深い関係がある。スタインバーグ (Steinberg, 1993) が述べているように、記憶は言語学習に決定的だからである。記憶が妨げられれば、SLA の速度も遅れるであろう。しかし、言語教育のほとんどは教科書を用いており、学習者はそれを基に学習をする。そして、音声はすべて文字で教科書に表記されているため、学習者はこれを頼りに第二言語を学習しようとする。その結果、日本人の英語学習者に見られるような、英語をカタカナで読もうとする現象が起きる。これは文字によって正しい音声への意識が阻害されているために生じた現象と考えられる。また、記銘すべき対象が教科書に記録されているため、すぐにそれを記憶する必要性がない。そのため、聴いたものをすぐに記憶するという習慣が無くなったのである。これも結果的に、言語の記憶を阻害していることにつながるのである。かつてこのような観点で SLA を論じたものはほとんど見ることはできなかった。

本稿はオングの考えを基に、成人の日本人英語学習を対象に二つの方法で別々に学習をさせ、その結果を比較した。一つは読解中心に学習をさせ、もう一つは聴解中心に学習をさせた。そして、これが発話にどのような影響を及ぼすのか分析した。

記憶と音声に関する理論的枠組み

デイビソン (Davison, 1997) は日本の英語教育では十分な音声教育がなされていないと指摘している。しかし、ライトボウンとスパダ (Lightbown and Spada, 1993) が紹介している「ただ聴くだけ」⁽²⁾の言語教育からもわかるように、音声は言語教育に重要な役割を果たす。ライトボウンとスパダは聴解に重点を置くことが言語習得に有効であると考えており、その根拠として次の二つの例を紹介している。

一つはアッシャー (Asher, 1977) の全身反応法 (以下 TPR)⁽³⁾である。アッシャーは TPR による実際の成果を報告している。もう一つの例はライトボウン (Lightbown, 1992) がカナダで行った理解中心教育 (Comprehension-based instruction)⁽⁴⁾である。ここでも聴解重視の言語教育が成果をあげている。ここでは読解も行われているが対象は 8 歳児で、それほど文字の多い教材を使用しているとは考えにくい。むしろここでは、聴解の割合が多かったと考えられる。

以上の例から、聴解重視の方法が SLA に優れた成果を得ていることが分かる。ここで重要なのは、これらの方法が文字の使用をほとんど必要としないということである。つまり、文字を使用しなかったことが学習者に良い結果をもたらしたと考えられるのである。しかし、これらの研究では文字が SLA に及ぼす影響について触れられていない。本稿ではこの問題に大きな関心を寄せている。ここでは音声に依存させた言語教育を聴解に基礎を置いた教育 (Listening-based instruction: 以下 LBI)⁽⁵⁾と呼ぶことにする。それに対して、文字に依存させた言語教育を読解に重点を置いた教育 (Reading-based instruction: 以下 RBI)⁽⁶⁾と呼び区別することにする。

ロングは人間の思考と記憶方法が、「声の文化 (Oral Culture: OC)」⁽⁷⁾と「文字の文化 (Literal Culture: LC)」⁽⁸⁾のどちらに属するかによって異なると述べている。OC ではあらゆる記憶を脳に依存するため、常にそれが鍛えられていた。一方、LC では文字に記録することができるため、脳が記憶する負担が

軽減されている。そのため、LCの記憶力はOCよりも衰退したのである。つまり、これは文字を使うことによって、成人に安心感が生じるということである。この安心感とは、忘却した知識を文字から再検索し、それを簡単に想起できるといったことから生じるものである。その結果、成人は記憶力の鍛練を怠り、本来あるべきその力を低下させたのである。一方、子供は成人の持つ安心感が持てないため、音声に対する意識が成人より研ぎ澄まされていると考えられる。それを補うために、子供はOCの成人と同様に音声の型を記憶に効果的に利用すると考えられる。音声の型については後で詳しく述べる。これによって、子供は成人よりも優れた記憶力を発揮することができると考えられるのである。この考えは成人のSLAが高い割合で文字に依存していることを前提としている。つまり、文字を極力使用しない成人のSLAは含まれていない。この理論が正当であるならば、成人も音声依存型学習をすれば、子供と同等の記憶力が得られるということになる。すなわち、文字がSLAに影響を及ぼしていると考えられるのである。

この文字の影響を認識するためには、OCとLCの違いを認識することが必要である。OCの記憶方法の特徴については、オングが次のように述べている。

In a primary oral culture, to solve effectively the problem of retaining and retrieving carefully articulated thought, you have to do your thinking in mnemonic patterns, shaped for ready oral recurrence. (Ong, 1982 : 34)

「一次的な声の文化では、よく考えて言い表された思考を記憶にとどめ、それを再現するという問題を効果的に解くためには、すぐに口に出るようにつくられた記憶しやすい型にもとづいた思考をしなければならない。」(桜井直文他訳, 1991)

つまり、オングはOCの成人は記憶に音声の型が用いることで、記憶された知識を効果的に利用することができたと考えているのである。すなわち、音

声の型が記憶を助けると考えているのである。オングはその型として、強い律動で形成された、頭韻や母音韻、決り文句等をあげている。そして、決り文句について次のように述べている。

Formulas help implement rhythmic discourse and also act as mnemonic aids in their own right, as set expression circulating through the mouths and ears of all. (Ong, 1982 : 35)

「きまり文句は、リズムカルに話すのをたすけるとともに、あらゆる人びとの耳と口をかいして流通する慣用表現 set expression として、それ自体記憶のたすけとなる。」(桜井直文他訳, 1991)

つまり、ここでもオングは律動的な音声の型が記憶を助けると主張しているのである。更に、オングは律動について次のように述べている。

Protracted orally based thought, even when not in formal verse, tends to be highly rhythmic, for rhythm aids recall, even physically. (Ong, 1982 : 34)

「生理学的にも律動は想起を助けるから、声の文化に基づく思考は、定型詩でなくても、それが長く続くと非常に律動的になる傾向がある。」(桜井直文他訳, 1991)

つまり、オングは人間が記憶に音声の型を用いるのは、それが人間によって生み出された技術であるだけでなく、人間に生まれつき備わっている能力であると考えているのである。このことから、音声の型が記憶にとって何らかの重要な役割を果たしているのではないかと推察できる。

また、ブラウン (Brown, 1990) は英語の母語話者 (以下 NS) が、語の認識を強勢の型に頼ると述べている。この根拠はある学生が“animism in King Lear”の“animism”を、“Animism” (大文字は強勢のある音節を示している) でなく“aNImism”と発音したので、ブラウンがそれを“aNEmia”と

・聞き違えたことにある。更に、子供が英語を記憶する場合、強勢が大きな影響を及ぼすとも指摘している。例えば、子供が“banana”を“nana”, “tomato”を“mato”と省略して発音する現象がある。ブラウンはこれを、強勢のない部分が無視したために起きた現象と考えている。従って、確かに英語のNSの言語習得は強勢に依存していると言える。また、モーラ (Mora, 2000) も旋律が正確な情報想起に役立つと考えている。音的認知能力は生まれる前から使い慣れているため、労力が少なくすむからである。このことから、記憶には音声の型が利用されており、それが記憶の助けになると考えられる。

以上のことから、本稿では文字がSLAに何らかの悪影響を及ぼしているのではないかと考えている。そして、音声の型が記憶の助けになると仮定している。従って、本稿はこの仮説の検証を目的とする。次に被験者の留学経験や語学力等に関する大まかな情報について述べる。

被験者

本稿の調査対象は日本人の成人L2学習者である。そのため、被験者は大学生と大学院生にした。また、被験者の英語レベルがある程度一定していることが望ましいため、全員大学で英語関係を専攻している者を対象とした。以下は被験者の詳細である。(①性別 ②年齢 ③正規の英語教育を受けた期間 ④留学経験期間)

表1 被験者リスト

A1:	①女性	②23歳	③11年	④なし
A2:	①男性	②35歳	③15年	④なし
A3:	①女性	②31歳	③11年	④なし
A4:	①男性	②24歳	③11年	④1ヶ月
A5:	①男性	②28歳	③15年	④なし
A6:	①女性	②24歳	③9年	④13ヶ月
A7:	①女性	②25歳	③13年	④11ヶ月
A8:	①女性	②26歳	③10年	④なし

A9: ①男性 ②36歳 ③23年 ④1ヶ月

B1: ①女性 ②21歳 ③9年 ④1ヶ月

B2: ①女性 ②20歳 ③9年 ④1ヶ月

B3: ①女性 ②21歳 ③9年 ④1ヶ月

B4: ①男性 ②20歳 ③9年 ④1ヶ月

B5: ①男性 ②21歳 ③10年 ④なし

B6: ①男性 ②26歳 ③13年 ④6ヶ月

B7: ①男性 ②22歳 ③10年 ④なし

以上が被験者に関する大まかな資料である。次に、どのようにして調査を行うのかその詳細と、調査の目的について記述する。

調査方法と目的

調査は英語句の記銘によって行われた。調査は4回で、週1回の記銘を3回行い、試験を2回施行した。記銘英語句は全20個である。その記銘語句及び、それに対応する日本語訳は次の通りである。

表2：記銘英語句とその日本語訳

(1) 音楽の才能	ability in music
(2) 連絡通路	access road
(3) 銀行口座	bank account
(4) 都市行政	city administration
(5) 未成年お断り	Adults only
(6) ~という強みを持つ	have the advantage of~
(7) 集約農業	intensive agriculture
(8) 在留外国人	resident alien
(9) 多才な人	a man of many abilities
(10) 呼び出し時間	access time
(11) 会計簿	account book
(12) 企業経営	business administration
(13) 成人教育	adult education
(14) ~を利用する	take advantage of~

(15) 農務省 (米)	the Department of Agriculture
(16) 外国人労働者	alien worker
(17) 修正高度	corrected altitude
(18) ばかげた野望	absurd ambition
(19) 多額の金	a large amount of money
(20) 祖先崇拜	ancestor worship

以上の記銘英語句は『フレーズで覚える TOEIC TEST 必修単語1600』(朝日香出版社, 1998)の付属 CD から任意に抜粋したものである。これらは被験者を A グループ(以下 A)と B グループ(以下 B)に分け, 別々の方法で記銘させた。A は記銘に記銘英語句の一覧表を用いた。また, それに対応する日本語の一覧表も与えた。これはインプット⁽⁹⁾を理解可能にするためである。音声は教材として一切与えなかったが, 辞書で発音を調べることは許可した。つまり, A では文字に依存した記銘を行わせたのである。一方, B は音声中心に記銘をさせた。B では記銘英語句が書かれた一覧表を与えず, 音声教材を使用した。これは被験者の記憶を音声に依存させるためである。しかし, インプットを理解可能にするために, A と同様に記銘英語句に対応する日本語訳の一覧表を与えた。

どちらのグループも 1 回の記銘時間は15分とした。従って, 総記銘時間は 3 週間で45分である。そして, この調査の第 2 回と 4 回に, 被験者が記憶した記銘英語句を確認するため, 再認テスト⁽¹⁰⁾と再生テスト⁽¹¹⁾を行った。再認テストは, A ではあらかじめ被験者に幾つかの英語句が書かれた一覧表を与え, その中から記銘した記銘英語句を抽出させ, B ではテープに録音されたものの中から, 記銘した英語句を抽出させた。そして, 再生テストは記銘した英語句を各自テープに録音させた。録音は日本語訳の一覧表を与え, 各日本語訳と記銘英語句を交互に吹き込ませさせた。

調査分析は以上の資料を対象に主にエラー分析, 検索時間, 発話速度に焦点を当てて行った。以下は調査目的の要約である。

調査目的 1 : SLA における文字の影響

文字が成人の SLA にどのような影響を及ぼすかを, エラー分析, 検索時間, 発話速度から考察する。

調査目的 2 : RBI と LBI の比較

RBI と LBI のどちらが成人の SLA に有利かを考察する。

これらを基に調査結果の分析を行った。次がその調査結果と分析である。

調査結果と分析

調査目的 1 : SLA における文字の影響

文字が成人の SLA にどのような影響を及ぼすかを, エラー分析, 検索時間, 発話速度から考察する。

エリス (Ellis, 1997) はエラーを 4 つに分類している。すなわち, 「省略, 付加, 誤った知識, 誤った順序」の 4 つである。これは形態素に焦点を当てた分類になっている。

表 3 : エラー分類(エリス 1994 : 56)

分類	説明	例
省略	完全な形式の発話に表れるべき項目が欠如すること。	She sleeping.
付加	完全な形式の発話に表れるべきでない項目が表れること。	We didn't went there.
誤知識	誤った形態素の形式を使うこと。	The dog ated the chicken.

誤順	発話において形態や形態群の配置を誤ること。	What daddy is doing.
----	-----------------------	----------------------

本稿ではこの分類を基に形態素のエラーを分析した。表4がそれである。

表4：被験者の形態素エラー分類

	省略	付加	誤知識	誤順	エラー割合
A1	1				5.0%
A2		1			5.3%
A3	1		5		30.0%
A4	1				5.0%
A5			1		5.0%
A6	3				15.0%
A7					0.0%
A8		1			5.0%
A9					0.0%
B1	3		3		35.3%
B2	1	2	3		30.0%
B3	3	1	2		37.5%
B4	2		2		21.1%
B5			3		15.0%
B6					0.0%
B7					0.0%

形態素のエラー割合は反応のあった解答のみを対象としてその結果を集計した。その平均はAが7.8%(中央値5.0%), Bが19.8%(中央値21.1%)であった。この結果から、形態素のエラー割合はBの方が多かったことが分かる。

表5は音韻エラーの割合をまとめたものである。ここでは被験者の音韻エラーを、その被験者が正解した問題の中に占める割合を個別に算出した。ここでの音韻エラーとは、分節的音素、あるいは超分節的音素のいずれかに明確な誤りが認められたものを意味している。つまり、解答に形態素エラーが認められるものは正解に含まれていない。

表 5 : 被験者の音韻エラー割合

A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9
15.8%	5.6%	14.3%	21.1%	10.5%	29.4%	5.0%	5.3%	25.0%
B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7		
0.0%	0.0%	20.0%	13.3%	0.0%	0.0%	15.0%		

表 5 から計算すると、A の平均は14.7% (中央値14.3%)、B の平均は6.9% (中央値 0%) であった。この結果から、明らかに A の音韻エラー割合が B よりも高いことが分かる。この分析から、RBI の SLA は音韻エラーの割合が高くなると結論づけられる。また、この調査で「暗記した英語句リストに発音のわからないものはありましたか」という質問に対して、「ない」と回答した全員に音韻エラーがあったという結果も得られている。このことから、文字に依存するあまり未習得の音声を習得したと錯覚する問題があることが分かる。

A と B の記憶検索時間を比較するために、記銘英語句(8)(17)(20)を対象にデータを比較する。この3つは記憶に成功した被験者数が最も多かったものである(第1回の再生テストで正解できず、第2回で正解できたもの)。検索時間は日本語訳を読み終えてから、それに対応する記銘英語句を言い始めるまでの時間の長さを計測した。被験者の記憶検索時間の計測には TC-V9900 オーディオ・デッキ (SONY) を使用した。計測はこのオーディオ・デッキのテープ・カウンターを基に1秒単位で行った。この方法では1秒以下の範囲で誤差が生じる可能性があるため、テープ・カウンターが0秒であっても、1秒以内の時間と考え、それを1秒と記録した。同様に、テープ・カウンターが1秒であっても、2秒以内の時間と考え、それを2秒と記録した。

記銘英語句(8)(17)の検索時間(秒)は次の通りである。

表 6 : 検索時間(記銘英語句 [8])

	最大値	最小値	平均値	中央値	対象検体
A	3	1	2.3	3	(A2・A4・A6・A9)

B	3	1	2.2	2	(B2 · B3 · B4 · B5 · B7)
---	---	---	-----	---	--------------------------

表7：検索時間(記銘英語句 [17])

	最大値	最小値	平均値	中央値	対象検体
A	5	1	2.9	2	(A1 · A2 · A3 · A6 · A7 · A8 · A9)
B	2	2	2	2	(B1 · B2 · B5 · B7)

記銘英語句(8)(17)の検索時間は B の方が A よりもやや優れていた。だが、記銘英語句(20)では逆の結果が得られた。記銘英語句(20)での A と B の検索時間は次の通りである。

表8：検索時間(記銘英語句 [20])

	最大値	最小値	平均値	中央値	対象検体
A	5	2	3.0	2	(A1 · A3 · A6 · A7 · A9)
B	6	2	3.5	3	(B1 · B2 · B3 · B7)

結論として、検索時間は B の方がやや優れていたということになる。このような結果が出た原因は、被験者数が極端に少なかったためと考えられる。なぜなら、被験者が少ない場合、たった一人の数値が大きくなるだけでも、全体に影響が出るからである。

また、A と B の発話速度を記銘英語句(8)(17)(20)に関して計測した結果は次の通りであった。ここでの発話速度とは、記銘英語句の日本語訳を読み始めてから読み終わるまでの時間の長さを 1 として、それに対応する記銘英語句を言い始めてから言い終わるまでの時間の長さの割合を算出したものである。

表9：発話速度(記銘英語句 [8])

	最大値	最小値	平均値	中央値	対象検体
A	1.3	0.7	1	1	(A2 · A4 · A6 · A9)

B	1.5	1	1.1	1	(B2・B3・B4・B5・B7)
---	-----	---	-----	---	------------------

表10：発話速度(記銘英語句 [17])

	最大値	最小値	平均値	中央値	対象検体
A	2	1	1.6	1.5	(A1・A2・A3・A6・A7・A8・A9)
B	3	1	1.8	1.5	(B1・B2・B5・B7)

表11：発話速度(記銘英語句 [20])

	最大値	最小値	平均値	中央値	対象検体
A	1.5	0.7	1.1	1.0	(A1・A3・A6・A7・A9)
B	2	1	1.5	1.5	(B1・B2・B3・B7)

この結果から、すべての数値が A と B で同等か、A で優れていた。このことから、発話速度は A の方が B よりも優れていたといえる。次に、再認テストと再生テストの結果を基に、RBI と LBI のどちらが成人の SLA に有利かを考察する。

調査目的 2：RBI と LBI の比較

RBI と LBI のどちらが成人の SLA に有利かを考察する。

表12：再認テスト最終結果

	忘却	誤認
A1	0	0
A2	0	0
A3	0	0
A4	0	0
A5	0	0

表13：再生テスト最終結果

	正解	無反応	エラー
A1	19	0	1
A2	18	1	1
A3	14	0	6
A4	19	0	1
A5	19	0	1

A6	0	0	A6	17	0	3
A7	0	0	A7	20	0	0
A8	0	0	A8	19	0	1
A9	0	0	A9	20	0	0
B1	0	0	B1	14	0	6
B2	0	0	B2	11	3	6
B3	0	0	B3	10	4	6
B4	0	0	B4	15	0	5
B5	0	0	B5	17	0	3
B6	0	0	B6	20	0	0
B7	0	0	B7	20	0	0

表13から判断すると、再生テストではAの方がBよりも優れていた。しかし、再認テストでは差が生じなかった。また、被験者の記銘に対する自信についてアンケートを取ったところ、次のような結果となった。

表14：記銘に対する被験者の自信

	A	B
90%以上記憶できる	3	1
70%以上記憶できる	5	1
50%以上記憶できる	1	2
30%以上記憶できる	0	2
ほとんど自信無し	0	1

表14を見ると、与えられた記銘英語句の90%以上を記憶する自信があった者が、A全体の33.3%(9名中3名)であったのに対し、Bでは14.3%(7名中1名)しかいなかったことが分かる。また、与えられた記銘英語句の50%以上を記憶できると回答したのが、Aでは被験者全員であったのに対して、Bでは57.1%であった。また、「音だけのため自分が覚えたものが、本当に当たっているのか最後まで自信が持てなかった(B3)」、「知らない単語を聞いてもわか

らなかった(B4)」、「スペルがわからないので、単語の一部があやふやになり
いまいち自信が持てなかった(B5)」といった意見があげられている。このこ
とから、文字が無ければ、たとえ意味が理解できても記憶できなかったこと
が分かる。しかし、本調査の行ったアンケートで「暗記した英語句リストに発
音のわからないものはありましたか」という質問に対して、Aの55.6%(9名
中5名)が「ない」と回答した。つまり、Bにとってもけして難しい単語ではな
かったと思われる。この結果から被験者のSLAがいかに文字に依存してい
たかが分かる。

検討

以上、成人のSLAにおける文字の影響について調査・分析をしてきた。そ
の結果は次の通りである。

調査目的1：SLAにおける文字の影響

文字が成人のSLAにどのような影響を及ぼすかを、エラー分析、検索時
間、発話速度から考察する。

分析結果：形態素エラーはAよりBの方が劣っていた。しかし、音韻エラー
の割合はBの方が優れていた。そして、検索時間もBの方がやや優れていた。
しかし、発話速度ではAの方が優れていた。この結果から、RBIは形態素の
記憶と発話速度に有効であったが、音韻の習得と検索時間に不利であること
がわかった。

調査目的2：RBIとLBIの比較

RBIとLBIのどちらが成人のSLAに有利かを考察する。

分析結果：形態素の記憶と発話速度で RBIの方が優れていたが、音韻の記憶と検索速度では LBIの方が優れていた。従って、この調査ではどちらが SLAに有利であるかは判断できない。

しかし、この調査には記銘時間が不平等であったという問題がある。この調査で B に与えられた各記銘語句の記銘時間は均一であった。B は 1 回 15 分の記銘時間内に、テープで 3 回ずつ繰り返された各記銘英語句を 3 回聴かされているのである。これを計算すると、各記銘英語句の記銘時間は 45 秒であったということになる。更に、そこに記銘英語句に対応する日本語訳を聞く時間も含まれるため、実質的には 45 秒よりも短かったといえる。一方、A は一覧表が与えられていたため、被験者は記銘英語句を自由に選択することができた。例えば、1 回目で 20 個中 10 個の英語句を記銘した場合、2 回目は残りの 10 個を集中的に記銘することができる。仮に 2 回目で残りの記銘英語句 10 個だけを集中的に記銘したとすれば、各記銘英語句の記銘時間は 1 分 30 秒にもなる。これは B での各記銘英語句を記名する時間の 2 倍に相当する。つまり、A の方が時間的に大変有利であったのである。従って、この調査で A の発話速度が B よりも優れていたという結果になったのは不思議ではない。また、被験者数が極端に少なかったことにも問題がある。更に、この調査では被験者が予想以上に音声言語を習得していなかったという問題もある。従って、この結果では A の方が優れていた点もあったが、それを直ちに信憑性のある結果と判断するのは危険である。

結論

LBI を行った被験者の多くが、文字がないと記銘ができないと錯覚していた。しかし、文字が読めなくても言語習得は可能である。それにもかかわらず、B の被験者は音声だけの記銘を困難だと感じていた。これはいかに被験者が文字に依存しているかを示す証拠である。また、RBI では、学習者が未習得の音声を知覚したと錯覚する問題もあることが分かった。今回の調査は

短期間だったため、被験者を LBI に十分適応させられなかった。被験者の音声に対する情意フィルター⁽¹²⁾が低下し、LBI に適応した時、学習者の SLA がどのように変化するかはまだ分からない。それを知るためには、被験者を文字から隔離し、音声に依存させる必要がある。しかし、それには莫大な時間と労力が要求されるし、倫理的な問題もある。文字は表記された形態素の記憶に便利であるが、音声の記憶は困難である。しかしながら、学習者は音声の記銘に文字を必要としていた。このことから、文字には LC の人間を無意識に言語の媒体の音声から遠ざける危険性があることがわかる。

この調査は被験者数が少なく、音声の型が記憶を助けるという仮説は十分に証明されなかった。しかし、この仮説が実証されれば、今後英語教育においてオーラルで授業をする意義がより明確になるであろう。今後は更に被験者を増やし、より信頼性の高い結果を得たい。

註

- (1) 「原則として、それぞれの文字が単音または音素に対応し、理想的には文字全体でその言語の全ての音を表すことが出来るような文字体系 (田中, 1997, 25頁)」を意味する。
- (2) 聴解を重視した方法で、自から他者に話しかける時以外は発話を強制されない。
- (3) 目標言語での命令に従うことで言語を学習する方法。学習者は命令に従うか、他者の命令に従った活動を観察するだけで、発話を要求されない。つまり、「聴くだけ」の理解中心による学習法である。夜間学校の学生を対象に、TPR によるドイツ語教育を行った結果、この夜間課程で32時間学んだ学生のドイツ語の聴解力は、通常の課程で75時間、あるいは150時間授業を受けた学生よりも優れていた (Asher, 1977, 12頁)。
- (4) ライトボウンはカナダでフランス語圏の英語学習者を対象に、ESL の時間に毎回30分の聴解と読解を行った。学習者は口頭練習や相互作用を一切受けず、自由に学習をした。その結果、理解中心課程の学習者は、通常課程の学習者より優れた成果をあげた。また、理解中心課程で学ぶと、話し言葉を直接教わらなくても、談話能力が向上するとされている (Lightbown and Spada, 1993, 89頁)。
- (5) 筆者の考案による暫定的な用語。
- (6) 筆者の考案による暫定的な用語。
- (7) 文字がない、あるいは文字を使用しない文化。訳は桜井他(1991)による。

- (8) 文字があり、文字を用いる文化。訳は桜井他(1991)による。
- (9) 「理解可能なインプットが言語習得を促進する」とする、クラッシュェンとテレルの仮説(Krashen and Terrell, 1983, 32-35頁)。
- (10) いくつかの刺激の中から、覚えたものがどれかを探し出すこと (二木, 1989, 3頁)。
- (11) 自分が覚えた知識を自由に思い出すこと (二木, 1989, 3頁)。
- (12) 情意フィルターが低下すると言語習得が促進されるとする仮説(Krashen and Terrell, 1983, 37-39頁)。

参考文献

- Asher, J. J. 1977. *Learning Another Language Through Action: The Complete Teacher's Guidebook*. California: AccuPrint.
- Brown, G. 1990. *Listening to Spoken English: Second Edition*. London: Longman.
- Courchêne, R. J. Glidden, J. St. John, and C. Thérien (eds.) 1992. *Comprehension-based Second Language Teaching*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- Davison, B.D. 1997. 'DISCOURSE AND LANGUAGE LEARNING.' *KANAGAWA UNIVERSITY STUDIES in LANGUE No. 20 1997*.
- Dulay, H., M. Burt, and S. Krashen. 1982. *Language Two*. New York: Oxford University Press.
- Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Ellis, R. 1997. *Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Gass, S. 1988. 'Integrating research areas: a framework for second language studies'. *Applied Linguistics* 8: 329-50.
- Krashen, S. and T. Terrell. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford: Pergamon.
- Lightbown, P.M. 1992. 'Can they do it themselves? A comprehension-based ESL course for young children'. In R. Courchêne, J. Glidden, J.St. John, and C. Thérien (eds.)
- Lightbown, P.M. and N. Spada 1993. *How Languages are Learned*. Oxford University Press.
- Mora, C.F. 2000. 'Foreign language acquisition and melody singing'. *ELT Journal Volume 54/2 April*.
- 二木宏明, 1989, 『脳と記憶 — その心理学と生理学』, 東京: 共立出版。
- Ong, W.J. 1982. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. Lon-

don: Meyhuen. (桜井直文他訳 1991, 『声の文化と文字の文化』, 東京: 藤原書店.)

Selinker, L. 1972. 'Interlanguage'. *International Review of Applied Linguistics* 10.

Steinberg, D.D. 1993. *An Introduction to Sycholinguistics*. New York: Longman.

田中春美(編), 1997, 『現代言語学辞典』, 東京: 成美堂。